

特集の意図

米国疾患管理予防センターが1988年に慢性疲労症候群の調査基準を作成してから今年で30年を迎える。病態不明であった疾患を30年でここまで解明できたことの驚きを、日本の研究者の活躍も含め、この節目の年に再確認したい。

特集の構成

1. 筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群研究の潮流（渡辺恭良，他） 本特集のイントロダクションとして、本疾患の研究史を日本を中心に紹介する。1990年に本邦の第一号患者が診断されてから、およそ30年。病態の解明に日本の果たした役割が非常に大きいことがよくわかる。

2. 筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群の診断と治療（倉恒弘彦） 本疾患の診断基準は米国疾患管理予防センターが1988年に調査のために作成した基準が原点にあり、その後、臨床に即した診断基準に向けて改訂されてきた。その歴史を振り返りつつ、2016年3月に発表された本邦における臨床診断基準を紹介する。

3. 筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群と脳内神経炎症（中富康仁，他） 本疾患は、原因不明で、疲労感という主観的症状が中心となるため、客観的な所見を見つけ出すことが求められている。著者らは、11C-(R)-PK11195というリガンドを使用したPETにより、本疾患患者脳内における神経炎症の存在を初めて明らかにした。本研究の概要を紹介する。

4. 慢性疲労症候群のバイオマーカー（山野恵美，他） 3と同様に客観的なバイオマーカーの確立を目指し、著者らは血漿中における代謝物質の網羅的解析（メタボローム解析）を行い、患者群と健常者群を判別することのできる代謝物質を同定した。モデル動物を用いた研究を含め同定までの道のりを振り返る。

5. 筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群の免疫病態（山村 隆，他） 本疾患に対する免疫学的なアプローチによる最近の研究トピックスを紹介する。また欧州で進行中の抗CD20抗体（リツキシマブ）の治験についても詳しく紹介する。

6. 特別寄稿 筋痛性脳脊髄炎／慢性疲労症候群における神経学的異常（アンソニー・コマロフ） 本疾患の臨床研究で高名な米国の医師、コマロフ教授に今回特別に寄稿いただくことができたので訳文とともに掲載する。寄稿の経緯などは訳者による解説をご覧いただきたい。